

有坂秀世氏の音韻観念の変遷について
—唐代長安の m・と mb・をめぐって—

吉池孝一

一

小稿は、唐代長安の発音の傾向として認められている鼻音の非鼻音化について、それを発音する中国人の発音の理想（音韻観念。{ }で括る）がどのようなものであったかという有坂秀世氏の考えを確認するために書いたものです。鼻音の非鼻音化については、『上代音韻攷』（中心部分は1933年に執筆）と「メイ（明）ネイ（寧）の類は果して漢音ならざるか」（1940年）で言及されております。言及されてはいるのですが、興味深いことに、非鼻音化した音に対して付与した音韻観念は異なっています。すなわち、1933年では{mb・}{nd・}等としており、1940年では{m・}{n・}等としているという具合です。このような有坂氏の考え方の変遷をとおして、音韻観念とはどういうものかということについて認識を深めたいと思ひ作業を始めたのですが、結末は中途半端なものになっております。

二

有坂秀世氏の遺稿である『上代音韻攷』は1955年に出版されましたが、森博達氏の1981年の研究によれば、その中心部分である第三部は、昭和八年（1933年）中に書き綴られたものと推察するという事です。その第三部のなかの「清濁」についてにおいて鼻音の非鼻音化に関わる言及がなされます。したがって、非鼻音化した音に対する音韻観念の考えは1933年時点のものということになります。

小稿の目的は、非鼻音化音とされる音を発音するさいの中国人の音韻観念について、有坂氏がどのように考えていたかを確認することですが、そのまえにまず音韻観念とはどのようなものかということについて、あるいは蛇足であるかもしれませんが、第二部の「音韻變化について」より一文を引用し確認をしておきたいとおもいます。なお、「音韻變化について」では、発音運動の理想すなわち音韻観念を{ }の中に収め、現実的に実現された個々の音声を〔 〕の中に収め両者を区別し、この方針にしたがい、第三部も書かれております。

まづ、私が自分の発音について観察した所を述べると、普通の場合、「青」は〔ao〕であり、「赤い」は〔äkaï〕であり、「土産」は〔mijæŋe〕である。〔a〕〔ä〕〔a〕〔æ〕の性質は皆それぞれに違ふ。併し、ごく注意して丁寧に発音する時は、「青」は〔ao〕、「赤い」は〔akai〕、「土産」は〔mijæŋe〕に變つて、皆一齊に〔a〕となつてしまふ。これは何故かといふと、元來私の頭の中にある理想即ち目的観念（音韻観念）は一種の〔a〕なのである。注意がよく緊張してゐる時にはこの理想が十分に實現されるけれども、注意が散漫になつてゐる場合には発音運動が充分に行はれず、種々の事情の影響を受けて〔ä〕〔a〕〔æ〕等に墮落して行くのである。即ち、上の〔a〕〔ä〕〔a〕〔æ〕等は、

現実に於ける生理的・物理的性質はそれぞれ違ふけれども、すべて同一の目的観念{a}の實現である。以上、發音は人によつて多少違ふであらうけれども、心理作用の方面では何人も大差は無いと思ふのである。(108-109 頁)

これを見ますと、音韻観念は、社会習慣として個々人のなかに蓄えられている發音の型であり聞きとりの型であると言いかえても良いようにおもいます。べつの言い方をしますと、どのようなつもりで發音し、どのようなつもりで聞きとるかという、“つもり”が音韻観念であるとも言えるでしょう。

三

さて唐代長安では音節初頭の鼻音の非鼻音化の傾向が生じて、外国人の耳には、明母 **m** は[**mb**]のように聞こえ、泥母 **n** は[**nd**]のように聞こえ、そのために外国人の耳をもつ日本の遣唐使は明母の米を濁音のベイとし、泥母の泥を濁音のデイとして聞き取り、日本に伝えたとされております。音声として外国人の耳に[**mb**]や[**nd**]のように聞こえたということについてはいいとして、問題は長安一帶の中国人自身がどのようなつもりで發音し聞き取っていたかという音韻観念です。この点について、『上代音韻攷』の中に当時の有坂氏の考えを垣間みることができます。『上代音韻攷』の「第三部 奈良朝時代に於ける國語の音韻組織について」に「○「清濁」について」という一文があります。やや長くなりますが引用します。

○「清濁」について 疑 (**ng**) 泥 (**n**) 娘 (**ń**) 明 (**m**) 等の諸母は、現代山西諸方言では一種特殊な發達を示してゐる。即ち文水・興縣・平陽等の方言では、泥娘兩母は常に **nd** (一二等) **ńd'** (三四等) のやうな形をとり、明母は常に **mb** となつてゐる。但し微母は平陽・興縣では **v** となり、文水では頭音が消失してゐる。疑母はこれら諸方言では、**ngg{ng}**【**ng** のミスプリか：吉池】や **ńd'** になつてゐることもあり、頭音の無くなつてゐる場合もある。又同じ山西省の歸化・大谷兩方言では、疑母は **ng{ŋ}** や **ngg{ŋ}** になつてゐる場合もあり、又頭音の消失してゐる場合もある。これらの諸方言は、官話の中でも、多くの點に餘程古い形を保存してゐる方言であるから、これら「清濁」(次濁、半清半濁・不清不濁、但し來母や日母を除く)の上にはあらはれた特徴もかなり古い時代から存在したものと見ることに何ら妨は無い。現に、有名な唐僧義淨(義は疑母の字)の名は土耳其人からは **Kitsi** と呼ばれたし、又逆に支那人が土耳其語を音譯した例では土耳其語の **b** に屢明母の字が充てられてゐる。これらによつても、古代支那語の或方言で、疑母や明母が **ngg mb** のやうに破裂音を含む形であつたことが想像される。古代支那語には無論有聲の兩唇破裂音は有つたけれども、それは出氣的の **b'**(並母)であつたから、土耳其語の無氣的 **b** を寫すには、一面から言へば寧ろ **mb** (明母) を充てる方が適當であつたかとも思はれるのである。この種の形の分布は、古代には恐らく北支那に於て現今よりも更に廣い地域にわたつてゐたものなるべく、日本漢音で泥娘母や明母が一般にバ行ダ行などの有聲破裂音で始る形を持つてゐるのも、多分この種の形を模倣した

結果であらう、とカールグレン氏は言つてゐる。(228頁)

この項目のほとんどは、有坂氏自身が言うようにカールグレン氏の *Études sur la phonologie chinoise* に拠った記述です¹。しかしながら、山西省の非鼻音化音の *ngg*【これは *ng+g* のこと】に音韻観念{*ŋg*}をあてているところなど、音韻観念がかかわる部分は有坂氏の考えの反映です。これによって中国人の音韻観念について有坂氏がどのように考えていたかを知ることができます。{*ŋg*}と表記することによって、疑母の中国人自身の発音の理想、すなわち音韻観念は{*ŋg*}であったと表明しているわけです。このような音韻観念を想定した理由の一つは、おそらくは、カールグレン氏からの引用にみえるトルコ語の漢字音写の記述によるのではないのでしょうか。

・・・又逆に支那人が土耳其語を音譯した例では土耳其語の *b* に屢明母の字が充てられてゐる。これらによつても、古代支那語の或方言で、疑母や明母が *ngg mb* のやうに破裂音を含む形であつたことが想像される。・・・(同上)

ここにあるように、中国人が明母 *m* の漢字をもちいて古代トルコ語の *b* を音写したということは、もしもそれが事実であるならば、中国人の明母の音韻観念が{*mb*}に類するものであり破裂成分を意図していた。そして破裂音の音韻観念を利用して音訳をおこなつたと考えざるをえません。そうであるならば、泥母も{*nd*}に類するものであり、疑母も{*ŋg*}に類するものということになるのでしょう。さきに述べたように、森博達(1981)によれば、『上代音韻攷』の「第三部 奈良朝時代に於ける國語の音韻組織について」は昭和八年中に書き綴られたものと推察するということですので、1933年(昭和八年)においては、非鼻音化した諸音の音韻観念は{*mb*}{*nd*}{*ŋg*}等であつたと考えていたということがわかります。

四

非鼻音化に言及した二つ目の論文「メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか」(1940年)には、つぎのようにあります。

昭和十二年、重慶出身の漆宗棠氏(東大言語學科卒業)が歸國されようとする前夜に一時間程對談の機會を得た際、同氏の米・你等の發音が殆どビ・ヂと聞えるのに氣付いた。そこで、改めて發音してもらつてよく聴くと、その實は[*mbi*][*ʰji*]のやうな音である。(ところが、御當人は、自身の發音上のかかる特色に全然氣付いて居らず、完全な *mi*, *ni* であると主張して、梃子でも動かない。)この破裂音的要素は、民[*mbin*]寧[*ʰjin*]のやうに鼻音で終る音節に於ては、かなり弱くなる。さうして、馬[*ma*]魔[*mo*]那[*no*]のやうに開いた母音の前に立つ場合には、完全に消失してしまふのである。(369頁)

これは昭和十二年(1937年)の調査によるものです。当時の重慶の人たちの音韻観念は米{*mi*}、你{*ni*}でありその音声は[*mbi*][*ʰji*]であつたということになります。これについては、有坂氏が本人に發音の“つもり”を確認しておりますので、穩当なものであらうとおもいます。

¹ 中国語訳『中國音韻學研究』北京：商務印書館により確認しました。

さらに、唐代長安におもむいた日本人や吐蕃人や西域渡来の僧が、長安の鼻音を聞いて破裂音を聞き取ったことについて、同論文の注の(11)にはつぎのようあります。

吐蕃の音譯例自體の中にも、難 'dan,nan 禰 'dog,nog のやうに、發音上に多少動揺の存したことを思はせる例がある。又、[m] と [mb] の差異や、[n] と [nd] の差異は、唐代の秦音を寫したものと稱せられる慧琳一切經音義に於てさへも、反切の上には全然表されてゐない。恐らく、これら各二つの音は、支那人自身にとつては、相異なる音韻として意識されてゐたわけではなく、前に書いた漆宗棠氏の場合と同様に、同一音韻の二つの相異なる音聲的實現に過ぎなかつたものであらう。併し、隴右の吐蕃や西域渡來の眞言祖師たちや本邦人の渡唐者など、外國人の耳には、その發音上の差異が明瞭に感ぜられたのである。(374 頁)

ここに“漆宗棠氏の場合と同様に、同一音韻の二つの相異なる音聲的實現に過ぎなかつたものであらう”とあるからには、唐代長安の鼻音の音韻觀念は{m-}{n-}等であり發音の仕方として破裂が伴う傾向があつたため、その音声は[m-]~[mb-]、[n-]~[nd-]等として實現したけれども、けつして發音の成分として破裂音の{b-}{d-}等を意図したものではなかつたということになります。

五

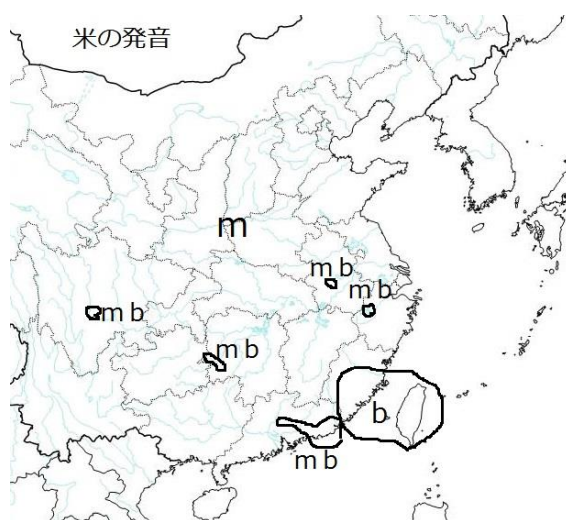
唐代の長安一帶に鼻音が非鼻音化するという現象があり、その音韻觀念として、『上代音韻攷』(1933 年執筆)は{mb-}{nd-}等を想定し、「メイ (明) ネイ (寧) の類は果して漢音ならざるか」(1940 年)は{m-}{n-}等を想定したというわけですが、なぜこのような違いが生じたのでしょうか。この点について、つぎに述べるように、じゅうぶんに納得のいく根拠を得ることはできません。

有坂氏は『上代音韻攷』(1933 年執筆)では{mb-}{nd-}等としたわけですが、その根拠はどこにあるのでしょうか。もしも、古代トルコ語の b の音訳漢字に明母字をあてる例によつたとしたならば理解ができます。古代トルコ語の b が、音声[b-]に近いものであつたとして、それに対する音訳が中国人によるものであるならば、その音韻觀念は{m-}ではありえず、{mb-}に類するような音韻觀念に破裂音が含まれたものであつたはずです。しかしながら、時代は中古の唐代です。音声としてならばともかくとして、發音運動の理想として{mb-}{nd-}{ŋg-}等の二重子音を想定するというのは無理な話ではないでしょうか。もっとも{b-}{d-}{g-}のような鼻音を伴つた破裂音であるならば可能であらうとおもいます。

六

他方、有坂氏が、「メイ (明) ネイ (寧) の類は果して漢音ならざるか」(1940 年)で、{m-}{n-}等とした根拠は二つあります。一つは、漆宗棠氏の米・你等の發音が[mbi]・[ʰji]であるにもかかわらず[mi]・[ni]であると主張した事実より、当人の音韻觀念が{mi}・{ni}であることを確認したこと。もう一つは、唐代の秦音を寫した『慧琳一切經音義』の反切に[m-]と[mb-]、[n-]と[nd-]等の違いが反映されないことより、音韻觀念は一つであつたことを確認したこと。以上の二つによります。『慧琳一切經音義』の反切より明母・泥母等の

音韻観念は一つであることがわかったとして、その音韻観念が{m-}{n-}等であったか、それとも鼻音と破裂音の両者を意図した{b-}{d-}のようなものであったか、ということが問題となります。有坂氏は、“恐らく……であろう”という表現をもって、漆宗棠氏の音韻観念を参考として{m-}{n-}等であったと想定します。漆宗棠氏の音韻観念は、今から 80 年ほど前、有坂氏存命当時の重慶方言の音韻観念であり、いうまでもないことですが、直接に唐代長安人の音韻観念を証するものではありません。漆宗棠氏の音韻観念が、1200 年ほど前の唐代長安方言の音韻観念の参考になるのであろうかという疑問が出るのは正直なところでしょう。しかしながら、現代の明母字の発音の状況をみるとつぎのとおりです。これは“米”（明母）の現代中国音の分布を曹志耘氏主編の『漢語方言地圖集 語音卷』（2008 年）によって作った簡略な地図です²。



ほぼ全域が m- です。台湾を含めた閩語の地域に [b-] となる区域があります。[b-] の左下は閩南語の区域ですが、その区域の潮州から海豊までのひとかたまりに [mb-] がみられ、内陸にも幾つか点在しているという状況です。肝心の、かつて長安があった陝西省の西安市の周辺は [m-] であり、すくなくともこの調査では [mb-] はありません。この状況をどのように説明したならば無理がないものとなるのでしょうか。ひとたび発音の理想として {b-}{d-} 等に類する破裂音が定着し、それが後世に、跡形もなく消失したとするよりも、一貫して音韻観念は {m-}{n-} 等であったが、発音の仕方として破裂が伴う傾向を示す場合があったため、その音声は [m-] ~ [mb-]、[n-] ~ [nd-] 等として実現したけれども、けっして発音の成分として破裂音の {b-}{d-} 等を意図したものではなかったとしたほうがよほど穏当ではないでしょうか。

七

もっとも、カールグレン氏が言うように、もしも古代トルコ語の b を明母の漢字で音訳した例があり、それが中国人によるものとしてよいならば、その漢語の明母の音韻観念は {m-} ではありませんが {b-} に類する破裂音を意図したものであったことになり、さきの六で述べ

² 吉池孝一(2016)を参照しました。

た“穏当”な想定としての音韻観念{m-}{n-}等は成立しないということになります。過去の対音資料は、過去の音韻観念を直接に証する恰好の資料となるので、上記の古代トルコ語の b に関わる音訳が中国人によってなされたか否かを確認する必要がありますが、残念ながら未だ確認は果たせておりません。中途半端に小稿を終わらざるを得ないゆえんです。

〈参考文献(発行年順)〉

- 有坂秀世(1940)「メイ(明)ネイ(寧)の類は果して漢音ならざるか」、『音聲學協會會報』第64號。『國語音韻史の研究 増補新版』東京:三省堂、1980:369-374。
- 高本漢著、趙元任、李方桂、羅常培譯(1948)『中國音韻學研究』北京:商務印書館。
- 有坂秀世(1955)『上代音韻攷』東京:三省堂。
- 森 博達(1981)「重紐をめぐる二、三の問題—中国語学会第30回大会音韻関係シンポジウムを聞いて—」、『中国語学』228:109-110。
- 曹志耘(2008)『漢語方言地圖集 語音卷』北京:商務印書館。
- 吉池孝一(2016)「漢音の米(ベイ)などについて」、『KOTONOHA』167:1-4。